



書評

The Extremities という本があることを教えられ手にとって感心していたやさきに、矢谷さんと小川さんが翻訳をすすめられていることを聞いた。吉報だと喜ばしく思ったことをおぼえている。

簡にして要とはこういう本のことをいうのではあるまいか。手あたりしだいにあげたその1ページに読者の目が思わず吸いつけられるのは、この本がそこに、視覚の効用をフルに生かして、学生や臨床家の求めているものをびたりと定着させているからだ。各筋の起始と付着、機能、支配神経と動脈とが、一目瞭然の、いっさいのむだを省いた形で明快にまとめられている。

図も非常に良い。思いきった簡略化と図式化が成功をおさめ、筋の全容と起始・付着、動脈・神経の主な走行のみならず運動点までもが鮮明な形で読者の視覚に飛び入ってくるような具合になっている。筋の掲載の順序にも、機能によるグループ化

簡にして要——鮮明な筋の全貌

「図説 筋の機能解剖」

Daniel P. Quining, John H. Warfel 著

矢谷令子・小川恵子 訳

をねらって細心の注意をはらっていることがうかがわれる。

各筋ごとに Gray と Cuninghams の解剖学テキストの対応するページを掲げてあるのは実に心にくいと思ったのだが、ちなみに手もとの Gray's Anatomy で調べてみると、これは 34 版であるためにせつかくのページ数も役立たずで残念であった。Daniels の Manual Muscle Testing の日本語版「徒手筋力検査法」の該当ページを付記されたのは、訳者の思慮深い親切である。作業療法士や理学療法士のような筋や神経についてはそらんじるほどによく知っていなければならない臨床家にとっては、ずいぶん便利な虎の巻ができたといってよい。

あえて難点を述べるなら（これは訳者に対してではなく原作者に対してであるが）、第1には筋の機能に関する説明が簡単にすぎて十分さを欠く箇所があること、第2は、支配神経の脊髄分節の高さが付記されて

いないこと、である。

おそらく、このようなハンディな本を作る上では、思いきった簡略が必要だったのだらうと思われる。しかしこの2つの点は、読者が他のテキストを参考にしながら、みずから書き足していくという方法で解決できる。原作者のすぐれたまとめ方と訳者の努力と読者の勉強とが1本化して、持ち主にとっては、それこそ宝のように貴重なテキストになっていくのかもしれない。

翻訳にあたられたお二人とも、これからの日本の作業療法の発展という課題を真剣に考えていられる方がたである。おそらくはこの仕事も、そういう課題をじっとみつめたうえでの決心から始まったものであるにちがいない。よい仕事をして下さったことに心から感謝するものである。（B5, 254 ページ、図240、写真1、¥2500）

（東大病院リハビリテーション・センター 鎌倉矩子）